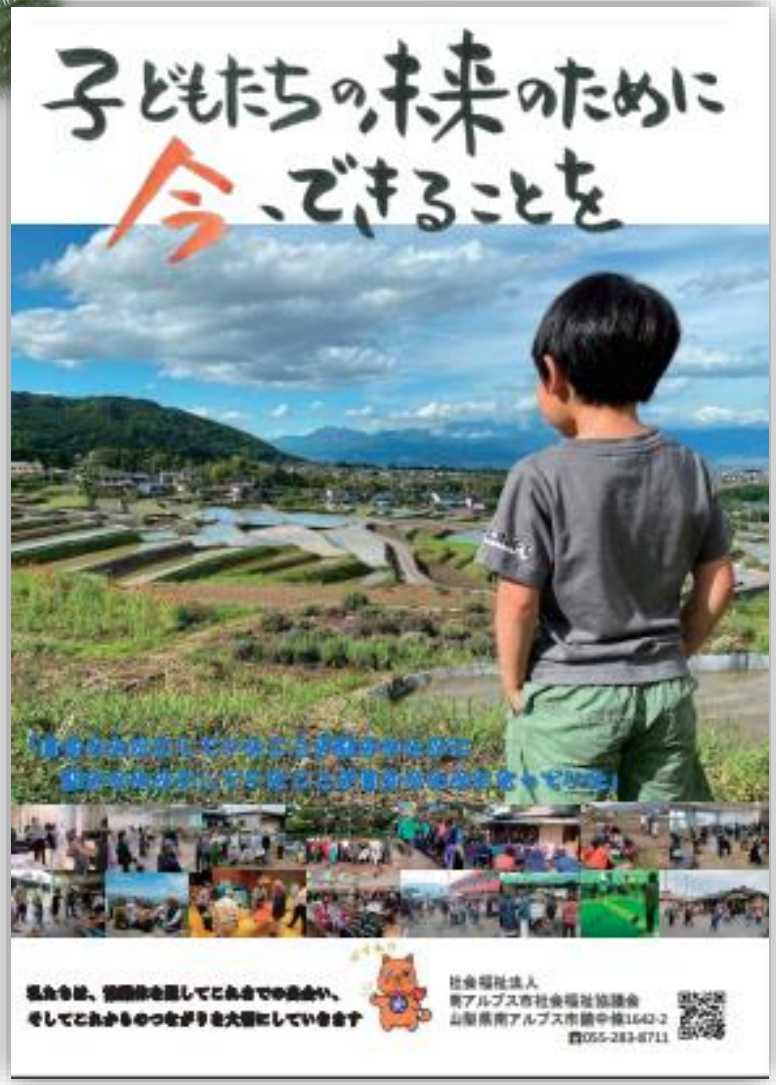
資料4

南アルプス市の2層と3層の取り組み
～住民主体の地域づくり～



南アルプス市社会福祉協議会
2層生活支援コーディネーター　小林

☆独居高齢者。子供は県外にいる。要介護２。足腰が悪くなりサロンにも行けなくなった。
・最近は誰とも話さず寂しく過ごしている。
・ゴミ出しができなくなった。
このような相談がきたら、どうしますか？

☆我がまちの協議体がどんなカタチだったらいいのかイメージを持つ
・協議会ではなく協議体
・ワイワイ、がやがやの雰囲気
・目指すところ ❶住民主体の地域づくり
❷ご近所同士の支え合いを広める
❸地域の中で支え合いの仕組みをつくる

人づくり・地域づくり・社会参加

今は、協議体があって本当に良かったです

協議体のこれまでの歩み

平成26年　ふくし小委員会2地区立ち上げ（社協）

平成27年　市は生活支援体制整備事業に着手、1層生活支援コーディネーターが配置（市）

平成28年　市と社協で何回も話し合い協議体の方向性を決める、第1回地域フォーラム開催、
1層協議体設置、2層2か所協議体設置

当初は、やらされ感（仕事が増えた！）

平成29年・30年　手上げ方式（勉強会）で2層協議体設置スタート
14か所に2層協議体設置、2層協議体随時定例会開催

住民の熱い思いにふれ、徐々に気持ちも変化

平成31年　2層生活支援コーディネーターを配置（社協・委託）

令和　元年　3層協議体設置開始

令和　2年　2層代表、副代表者意見交換会開催スタート、2層活動費補助開始、支えあいディスカッション（意見交換会）開催スタート

令和　3年　3層協議体46ヶ所、3層交付金開始、専門職との合同研修会開催スタート

令和　4年　3層協議体50か所

令和　5年　3層協議体53か所

今では、社協としてもとても大切な事業という認識

なぜ、社協が協議体に…？

住民主体の地域づくり➡**社協の使命**

困りごと支援

やる気を応援する支援

2つのことを可能にしてくれるのが協議体

SCとして　資源の創出＜住民の活動を支援・応援

地域福祉課１０名で対応

2層１６か所協議体事務局…代表・副代表と事前打ち合わせ、開催通知の発送、記録、印刷

3層５３か所協議体の立ち上げ支援と運営補助（依頼があれば参加する）

Q　誰が参加しているの？

A.　手上げ方式で募っている。有志、自治会関係者、民生委員、老人クラブ、介護保険事業所、駐在所の警察官、小中学校の先生など様々な方々。**6割男性。**10名～30名の参加者が参加している。

平成29年5月手上げ方式の協議体設置スタート

2層協議体手上げ方式のこれまでの手順

自治会長･民協代表･社協担当職員打ち合わせ

↓

地元民生委員会議･自治会で説明

↓

住民向けチラシ全戸配付・手渡し配付

↓

「地域の支えあいを考える会」全体説明会の開催
終了後アンケート（協力したい、関心のある人を対象に）

↓

勉強会全３回　　他人事から自分事
１回目地域のいいところ探し
２回目地域課題
３回目こうなったら住みやすいな

↓

協議体メンバーとしての意思確認

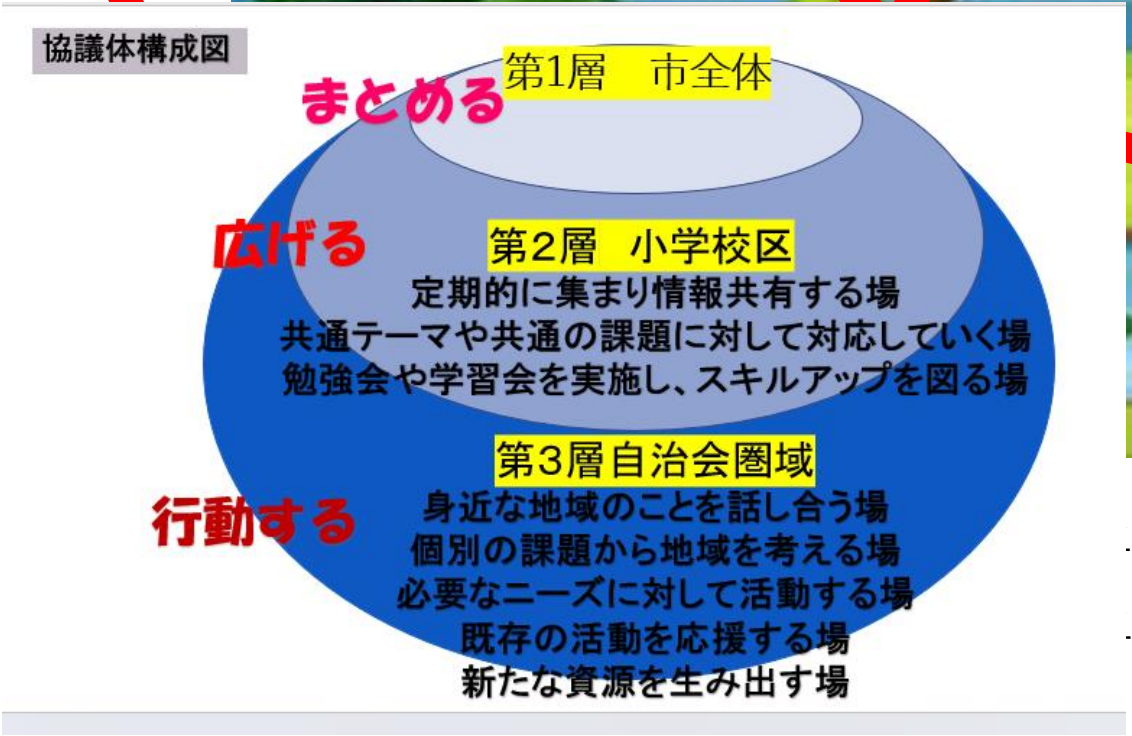
2層小学校区　16か所／小学校15校（425名が登録）
3層自治会圏域　53か所／88自治会

３層がつくられた背景

意思確認ができた方々を中心に２層協議体が誕生。定期的な話し合いを進めていたが

①２層では大きすぎて地域課題が把握しづらい。
②より身近なところでは知り合いが多いし、協力者も募れる。
③活動に移りやすい。
などの理由から協議体メンバーの意思で各３層が立ち上がってきた。

７年～８年協議体をしてくると、だんだん人が減ってきたり協議体参加者の高齢化も見受けられる。再度、住民に対しての説明会を行い、担い手を見つけているところもある。



し、自分たちが現在していることで
たにできることを考える＝**協議体**

こんなことがありましたpart①　「なかなか進まなかった協議体

もともと子どもはおらず。
夫の退職後山梨に家を買い
引っ越す。（新興住宅地）

あれから20年。
二人とも要介護３。
夫は歩行器がないと歩けない。
妻は認知症があり、徘徊し何
度も警察の保護に。

近所の方はほとんど働き盛り。
日中家にいる人は少ない。

ケアマネジャーと
包括支援センター
職員、CSW、協
議体メンバーで情
報共有。

<u>見守り体制</u>

- 日中の見守り強化。
- 区長から組長へお願い。
- 民生委員の訪問。
- 近所の方にお願い。

あまり活動が活発では
なかった協議体。この
活動をきっかけに居場
所について話し合うよ
うになった。

焦らずゆっくり・専門職とのつながり

こんなことがありましたpart②　「活動部隊として」

協議体メンバーで地域の課題を把握。少子高齢化に伴い庭木の手入れができなくなってくる、耕作放棄地も増えてくることが予測された。

協議体に参加していた消防団のOB。若者もできる部分はあると考えた。

せっかく地域のために尽力してきた仲間。このまま終わるのももったいない。仲の良い消防団OBと現役消防団10名でMAGONOTE結成。

協議体の依頼を受けて、高齢者世帯や独居高齢者の庭木の剪定、草取り、粗大ごみの撤去など無償で行っている。

別の地区の協議体から一緒にしてもらいたいと依頼があり、支援している。地域の実情を知ることにつながっている。

担い手の確保

2層（小学校区）・3層（自治会圏域）で住民主体の活動が生まれました

生活支援

- 外出・買い物支援
- 見守りや声かけ
- ちょっとした困りごと支援
- 粗大ごみの撤去
- 害獣対策用電柵管理支援
- 草取り、木の伐採
- 制服リサイクル
- 小学校登校時の見守り
- 主要道路のごみ拾い

居場所づくり

- 公民館開放日開設
- サロン開催
- 子ども食堂
- 話し相手
- 地域の行事への協力
- 映画会開催
- マルシェ開催
- 休耕田の有効活用（花づくり・野菜づくり）

介護予防

- 健康講座開催
- 百歳体操開催
- 軽スポーツ
- 老人クラブの応援
- 移動販売の手配
- 高齢者の食事会
- ラジオ体操居場所

広報・周知活動

- 広報誌づくり
- 瓦版の発行
- 見守り運動チラシづくり

協議体の課題

代表に責任や負担がのしかかっている。

協議体が住民に広がっていない。

協議会になってしまい、活動がなかなか生まれない。

話し合いに留まっていたり、活動のマンネリ化しており、モチベーションが維持できるか心配。

協議体としての地域づくりの方向性が見えてこない。

地域に困っている人がいることは知っているが、一歩踏み込めない。SOSもあがってこない。

コロナ禍で活動が停滞してしまった。

地域の他団体との連携が上手くいかない。

3層の活動が活発でいいことだが、2層の役割が見えづらい。

話し合いがワイワイ、がやがや言える雰囲気ではない。

自治会や民生委員さんに理解してもらいたい。

新たな人が入らず、協議体が存続していけるのかな。

参加者が徐々に減っている。

協議体事業の段階

協議体の声を聞き、それぞれの段階で住民主体の活動ができるようにアプローチ（しかけ）することが大事です。

無関心期

大人の福祉教育

無関心層へのアプローチ

２層設置時期

・福祉に興味がない
・協議体とは何か？
・やらされ感
・何をしていいのか

関心期

代表、副代表決め。根気よく話し合い。地域課題、地域資源の把握。

２層話し合い時期

・主体性がでてこない
・活動につながりづらい（何をしていいか）
・モチベーション低下
・参加者減

専門職との研修

準備期

活動を通して協議体を振り返る。

２層活動
３層設置時期

・２層ではエリアが広すぎる
・しっくりこない（活動もイベント的で）
・地域性（地域によって考え方や参加者数が違う）

個別相談のなげかけ

実行期

より身近な場での課題、資源把握と活動。

３層活動時期

・３層それぞれの活であり、格差が生まれる
・２層の役割が不明
・新規参加者がいない
・自分たちの活動に自信がもてない
・課題の解決策が不明

福祉部局以外の市職員との合同研修

維持期

それぞれの役割が明確化。活動が継続。支えあいの広がり。

２層・３層活動時期

・協議体の将来が不安
・参加者の高齢化
・活動のマンネリ化

2層代表・副代表意見交換会

協議体スキルアップ勉強会

福祉部局以外の市職員との合同研修会

当初は、高齢者向けの居場所や生活支援の仕組みづくりなど高齢者を支援する活動が主でしたが、最近では、子どもや障害者への取り組みなど高齢福祉の分野を超えた活動も増えつつある。また、地域課題も空き家、遊休農地、不法投棄、移動問題など福祉の分野を超えた課題も見えてきており、福祉以外の取り組みが増えることも予想され、色々な部署の市職員との連携も必要となると考え、勉強会を企画した。

分科会
子ども「障がい福祉から見た子どもたちの状況」
外出支援「外出支援と移動手段」
健康長寿「居場所づくりと介護予防」
ごみ出し「ごみ出し困難者への支援」

今年度は、空き家、耕作放棄地、外語人、新住民についての勉強会をする予定

専門職との研修

目的：個別課題の把握が容易にできず、地域課題が明確化されないことが一番の悩み。個別の課題が把握できれば、活動にもつながりやすいと考え、個別の課題をたくさんもっているケアマネ等の専門職と協議体とがお互いに歩み寄れる機会とする。
参加者：協議体参加者とケアマネ、地域包括支援センター職員、計画相談等
内容：講義、事例と通しての意見交換
頻度：年１回実施

事例内容
①県外から移住してきた日中独居の高齢者　②軽度の認知症の高齢者夫婦
③若い世帯（ヤングケアラー）　④８０５０問題

個別相談のなげかけ

近所には気になる人がいるが踏み込めない協議体参加者。SOSを発信したいけどどこへ言ったらいいか分からない高齢者。本当は地域の理解があればもっと暮らしやすいのにと感じているがどこに相談していいか分からない専門職。それぞれをつなぐ。最近では、ケアマネの事業所からも協議体の説明をしてほしいと依頼あり。

専門職とつながることで話題と活動が生まれる

協議体事業に関わることのメリットを感じています

・協議体に関わっている住民との関係性の構築
　役職以外の有志とのつながり（参加者…男性6割）　社協を知ってもらえる機会
・地域づくりは「人づくり」　この時代の「支え合い・やさしさ」のバトンを次の世代へ
・協議体は人の心を動かせる（他人事から自分事に）
・個別支援の延長線に地域づくりがある（個別課題から地域課題への展開）
　ケアマネ時代どこにも投げかけられなかった　今は投げかけられる場がある
　インフォーマル支援の視点（人と環境との相互作用）
・住民主体の大切さ
・地域共生社会の実現を可能にする

「地域福祉」
たまたまあの人（キーパーソン）がいたから　たまたまあの団体と出会えたから　たまたまあの地域だからできた
地域福祉は、偶然の出会いだけでつくっていくものではなく、時に「会うべくして出会える」ことが大事。協議体は、住民一人ひとりを巻き込めるチャンス。偶然を必然にしてくれる事業だと確信しています。

最後に…SCが孤立しないように

社協内部の研修会

協議体は、担当者及び担当課だけで実施していくものではない。フォーマルサービスに満足するのではなく、インフォーマル「その人らしさ」の視点を持って、地域に働きかけていくことが大事。
内容：講義、事例発表（介護事業所職員、住民）、グループワーク

２層協議体運営意見交換会

運営をサポートしていく上での悩み、協議体自体の課題、成果や効果を出し、解決策を考えると共に市と社協の方向性の確認をするなど協議体のバックアップができるようにする。
参加者：市担当課職員、社協担当課職員、地域包括支援センター職員

協議体は、住民に丸投げするものではなく、市や社協がお膳立てして引っ張っていくものでもない　大事なことは、時間をかけても共感しながら共に考えていくこと
住民の『やりたい・がんばりたい』をこれからも応援していく